

実践事例

第2学年歴史的分野

「近世の日本～安土桃山時代から江戸時代～」の実践

1 単元について

本単元は、学習指導要領の歴史的分野の大項目「(4) 近世の日本」に入る。中項目は「ア 戦国の動乱、ヨーロッパ人來航の背景とその影響、織田・豊臣による統一事業とその当時の対外関係、武将や豪商などの生活文化の展開などを通して、近世社会の基礎がつくられていったことを理解させる」および「イ 江戸幕府の成立と大名統制、鎖国政策、身分制度の確立および農村の様子、鎖国下の対外関係などを通して、江戸幕府の政治の特色を考えさせ、幕府と藩による支配が確立したことを理解させる」を取り扱う。

人間は長い歴史の中でたくさんの選択を行ってきている。「歴史」とは、これまで多くの人々が行ってきた選択の結果を学んでいるという側面があると言っても過言ではない。人は人生の岐路に立ち、選択を迫られたとき、自分の置かれた立場、自分を取り巻く様々な環境、自分自身の考え方などを判断基準として、自分なりの決断をしていくものである。それが激動の時代にあっては、そこまでの時代の有様を大事にするのか、それともこれからの新しい時代に対応して生きていくのか、はたまたどちらにも与さずに進んでいくのか、といったように、時代の流れが人々の選択に大きな影響を及ぼしてきた。この単元では、仮想の武士を取り上げ、人生の選択について価値判断させる。そうした学習を通して、価値判断の基準となる時代背景について整理することで、大きな時代の転換を捉えることができる。と同時に、様々な事実を理由づけして自分なりの価値判断を行っていくことで、生徒たちの思考力・判断力・表現力等を養うことができる。

なお、取り上げる人物を仮想としたのは、実在の人物であると結果が出ていて価値判断が歴史的事実に縛られてしまうからである。ここでは仮想の人物を扱い、生徒をその時代の人物に仮託させることで、より主体的に追究する姿が期待できる

この単元においては、中世から近世への転換の様子を含めた、織豊政権の安土桃山時代から徳川政権の江戸時代への転換の様子を捉えさせる。そのために、この転換期の時代を生きた高山右近をモデルとした、仮想の武士「高佐源丞右衛門」がとるべき人生の選択を価値判断させる。単元の初めに仮想武士がとりえる選択肢を提示し、その判断のもととなる時代背景について学習を進める。単元の後半では、個々が考えた選択について討論を行い、そこで出された事実やその時代における見方、考え方について整理することで、時代の転換についてまとめるようにしたい。

2 教科の本質に迫るための手立て

①価値判断する場面の工夫

社会認識形成を通して市民的資質を育成するための合理的判断を行うには、価値判断する場面が必要である。歴史的分野における「～時代とは～という時代であった」などの概念的な知識を土台に価値判断を行い、「～すればよい」といったような合理的判断を迫る場面を学習課題として設定した。

②主体的に追究する課題設定の工夫

歴史はすでに起こってしまった事実を検証したり、解釈したりする分野であるので、合理的判断を迫る場合は、仮想場面を設定し、歴史的事実に縛られないようにすることが大切であると考え。今回は仮想の人物を扱い、生徒をその時代の人物に仮託させることで、課題を追究させるようにした。

③ワークシート(学習カード)の工夫

「トゥールミン・モデル」を活かしたワークシートを用いることで、確かな根拠をもとに考えることができる。選択〔トレードオフ〕したこととその理由〔インセンティブ〕を、選択によって得られるもの〔便益〕と失うもの〔機会費用〕に分類しながら記述できるようにした。そうすることで、自分の思考・判断したことを整理しながら、見方・考え方を表現することが期待できる。

④身に付けるべき力の定着を図る評価問題の工夫

社会科において身に付けるべき力(社会認識形成、市民的資質育成)にかかわる、思考力・判断力・表現力を評価する評価問題の工夫を行う。そうすることで、同質の価値判断場面を複数回経験させることができるとともに、身に付けるべき力の確実な定着を見取ることができる。と考える。

3 単元の目標

○近世の歴史的事象に対する関心を高め、意欲的に追究して近世の特色をとらえようとしている。

【社会的事象への関心・意欲・態度】

◎近世の特色について、課題を設けて追究したり意見交換したりするなどして、歴史的事象について予想を立て、資料をもとに多面的・多角的に考察し、公正に判断して、その過程や結果を適切に表現することができる。

【社会的な思考・判断・表現】

○近世の特色について、資料を適切に選択し、読み取ったことを活用することができる。

【資料活用の技能】

○近世の特色について理解することができる。

【社会的事象についての知識・理解】

4 全体計画 (全4時間)

第1次：安土桃山時代とはどんな時代だったのだろうか。・・・1時間

第2次：仮想武士高佐源丞右衛門はどうすれば
よいだろうか。・・・・・・2時間（本時2/2）
第3次：江戸時代のはじまりはどんな時代だったの
だろうか。・・・・・・1時間

5 本時の学習（全3/4時間）

(1) 指導目標

・安土桃山時代はヨーロッパとの交流がさかんになったが、江戸幕府の成立とともにキリスト教の禁教や海禁政策が推し進められていったこと、大名統制など幕藩体制が確立されていったことなどの近世初頭の時代の特色について理解させる。 [科学的社會認識形成]
・移りゆく時代の中で生きる人物の生き方を考えることを通して、歴史的分野の知識・概念を基盤とした合理的判断力を身に付けさせる。 [市民的資質育成]

(2) 展開

学習活動と予想される生徒の反応	指導上の留意点
1 学習課題を確認する。 高佐源丞右衛門はどうすればよいだろうか。	
2 課題について、意見交換する。 A案:キリシタン大名と共に家康に武力抵抗 ↑【理由付け】…信仰を維持するために抵抗 ・幕府はまだ盤石でない。団結して戦えば、言い分を通すことができるかもしれない。 ・キリスト教を捨てるぐらいなら、団結して殉教するつもりで武士として戦えばよい。 B案:キリシタンとして海外の日本町に移住 ↑【理由付け】…信仰を維持するが抵抗せず ・キリスト教を信じるのができないのであれば、日本町で信仰を続ける方がよい。 ・幕府に反逆しても、家を滅亡に招くことになり、忠義を果たしたことはない。 C案:棄教して徳川幕府の大名として生きる ↑【理由付け】…信仰を維持せずに臣従する ・信長や秀吉に従ってきたが、家康は関ヶ原で勝利し、強大であるので逆らえない。 ・茶人や築城技術者としての地位を築いているので、文化人として生きていけばよい。	・判断する際の『選択の基準』が、仮想武士のモデルである「高山右近の生い立ちから解釈した見方・考え方」であることを想起させ、判断の妥当性の検証を行うための話し合いであることを助言しながら、論点がずれないように意見を板書などでも整理する。 ※「生い立ち」から考えられる『選択の基準』 ①主君への忠義に篤く、武功を挙げている。 ②キリスト教を信仰し、布教に熱心である。 ③父母や妻子などの家族を大切にしている。 ④高山家という家の維持を大切にしている。 ⑤心静かな茶の湯の精神を大切にしている。 ・反論の場面を適宜設け、生徒の思考や判断がより深まるようにする。 ・ワークシートには選択内容やその理由を便益・機会費用の視点から記述できるようにする。 ・前時までに実施したプレテストと同じ内容のポストテストを実施することで、生徒の理解や思考・判断の変容を評価する。
3 討論したことをもとに、安土桃山から江戸時代の時代の転換のようすや、それぞれの時代の特色について論述する。	

6 成果と課題（評価問題の工夫の視点から）

本実践においては、前頁の2「教科の本質の迫る手立て」のうち、④「評価問題の工夫」を重点として成

果と課題について振り返りたい。

(1) 評価問題作成の意図

本実践では、「どうすればよいだろうか」という問いに対して、A：キリシタン大名と共に家康に武力抵抗する、B：キリシタンとして海外の日本町に移住する、C：棄教して徳川幕府の大名として生きるという3つの立場に分かれ、それぞれ理由付けについて話合うという授業が展開された。高山右近の生い立ちから解釈した「選択の基準」を明確にして、中世から近世移行期の時代の特色（社会認識形成）を捉えることで、判断する場（市民的資質育成）ができると考えた。そして、評価問題では、授業では扱っていない以下の資料と問いを用意して、社会認識形成および市民的資質育成に関わる思考・判断・表現力等を評価しようとした。

(2) 評価問題の実際

<問題Ⅰ> 社会認識形成に重点が置かれた評価問題

真田氏は豊臣政権の下で領地を維持することができた。資料1・2を見て、真田氏の当主がこの頃に行ったと推測できるものを、ア～カから3つ選び、記号で答えなさい。

資料1 北条氏と真田氏の関係 秀吉の上洛命令を拒否していた北条氏は惣無事令を無視。真田氏の名胡桃城を攻撃する。秀吉はこれに怒り、1590年小田原城を攻撃して北条氏を倒し、全国を統一。
資料2 豊臣政権による全国統一事業 秀吉は全国統一をめざす中で、次の(1)(2)の場合において軍勢を派遣し、大名を討伐した。 (1)秀吉のもとに上洛(上坂)せず、朝廷を後ろ盾とする自らの政権に敵対したとき。(備考)上洛：京都に行くこと 上坂：大阪に行くこと (2)惣無事令を出して、秀吉の承認なく勝手に自力救済を禁止し、これに違反したとき。 また、大名の妻子を京・大阪などに住まわせ、大名は京・大阪と領国間を往復した。

- ア 秀吉のもとに訴えを出して判断を仰いだ。
- イ 領地や城を取り戻すために戦った。
- ウ 同盟を結ぶ上杉氏に北条氏を攻撃させた。
- エ 当主の次男信繁を人質として大阪に送った。
- オ 一揆勢力を味方にして秀吉に屈服した。
- カ 秀吉がいる大阪に当主自らが赴いた。

<問題Ⅱ> 市民的資質育成に重点を置いた評価問題

「(仮想武士)高佐源丞右衛門」の授業を想起しながら資料3・4を見て、あとの問いに答えなさい。

資料3 時代の流しにどう対応するかの行動パターン A:自分の考えを貫けるよう現状を打開していく。うまくいかなかった歩を得られるし、逆にリスクもある。 B:自分の考えを貫けるよう適切な体制がある場所に移る。住み慣れた所や人から離れないといけない。 C:時代の流しに対応して考えを行動に出しすぎない。中核には入れないがそれなりに生き延びられる。

資料4 「家康の禁教政策」と「3人のキリスト教徒の生き立ち」		
家康は統一政権の樹立、いわゆる幕藩体制確立のために禁教が有効な政策であると認識していた。徳川政権つまり幕藩体制の確立・維持発展のために、全国一斉に厳しい禁教令が発せられることになった。		
高山右近はキリスト教徒であり、軍略をもった武将であった。利休七哲に入る有名な茶人で、国内外に広く人脉をもっていた。 ↓選択↓ 禁教に従わず追放処分を受ける。	X 黒田官兵衛は領地をもち、多くの家臣を従えるキリシタン大名で、秀吉も恐れた軍略家である。また、家族を大切にしていた。 ↓選択↓ 徳川政権の命令に従って棄教する。	Y 天草四郎時貞はキリスト教徒であり、若くして3万7000人のキリシタンを含む百姓など一揆軍から大将として信頼を集めていた。 ↓選択↓ キリスト教信仰を守るため戦う。

【問い】資料4中の下線XまたはYの人物のいずれかについて解答しなさい。XもしくはYの人物が選択した行動パターンは資料3中のどれにあてはまるか、A～Cから1つ選び、記号で答えなさい。また、その人物がその行動を選んだ「理由」を簡潔に説明しなさい。

(3) 評価基準

問題Ⅰについての正答と基準

<p>【正答】ア・エ・カ <完答></p> <p>「中世は、社会問題は各自の実力・判断で解決する自力救済の時代であった」という時代の特色にあてはまるものは、選択肢のイ・ウ・オとなり、「近世は、社会問題は第三者(その多くは上位の権力者)の判断で解決する他力救済の時代であった」という時代の特色にあてはまるものは、選択肢のア・エ・カとなり、ここでは後者が正答となる。なお、一つでも選択を誤れば真田氏は生き残れなかったと思われるので、記号は3つの選択肢すべて正解で正答とする完答問題とした。</p>
--

問題Ⅱについての正答と基準

<p>・選んだ人物が「X」の場合</p> <p>①行動パターンは基本「C」</p> <p>②理由は「家族や家臣の生命や生活を守っていききたいから」や「後々、キリスト教が許される世に軍略で変えていくことができるかもしれないから」となる。</p>	<p>・選んだ人物が「Y」の場合</p> <p>①行動パターンは基本「A」</p> <p>②理由は「キリスト教を守るためには、生命をかけて打開することができるかもしれないから」や「たくさんのキリスト教徒の信頼を裏切るわけにはいかないから」となる。</p>
<p>・資料の内容を用いて、説明していること。</p> <p>・それぞれの人物に関わる価値にふれて説明していること。</p> <p>例えば、「軍略を用いることに長けていた」「熱心なキリスト教徒で信仰を守ろうとしていた」「家族や家臣の生命や生活を大切にしようとしていた」などの基準が説明に入っていること。</p>	

(4) 評価結果(n=119)

	問題Ⅰ	問題Ⅱ	問題Ⅰの記号選択の分布状況						
			選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ	カ
正答	40人 (33.6%)	92人 (77.3%)							
誤答	71人 (59.7%)	18人 (15.1%)	人数	69	29	38	72	25	96
無答	8人 (6.7%)	9人 (7.6%)	順位	③	6	4	②	5	①

(5) 成果と課題

① 成果

問題Ⅰについて、昨年度まで課題としていた思考・判断・表現力等を問う評価問題として、記述式だけではなく、記号選択式の問題を作成することができた。

問題Ⅱについては、他に応用して考え、自ら解決方法を見つけ、取捨選択したことを評価するという点から、授業で扱っていない資料を用いたので、生徒の思考・判断・表現力等について、授業で行った判断を転用して検討できる問題であったと考えられる。

また、ツールミン・モデルを活用した「便益と機会費用」について検討しながら「選択(トレードオフ)」について理由を書かせるワークシートを授業で扱ったこともあり、本評価問題においても理由付けの内容についての的確に説明できていた。

② 課題

問題Ⅰについては、(3)④の評価結果を見て分かるとおおり、誤答の割合が高い。これは、一つでも選択肢を誤ったら真田氏は滅んでいたかもしれないという出題の意図から完答問題としたこともあるが、本時の学習において、時代の特色を捉えるという社会認識形成が弱かったということが分かる。一方で、記号選択の分布状況を見ると、正答の3つの選択肢にまとまっていることからそれなりに社会認識形成に成果があったとも捉えられるので、出題方法についての検討が必要であろう。総じて、時代の特色に対する概念形成の手立てや市民的資質育成を統合的に説く社会科学としての単元構成や資料の提示、学習形態において、今後も検討が必要である。

歴史的分野における価値判断型の授業を行うに際し、今回は実在の人物をモデルにした仮想の人物を想定した教材を取り扱ったが、歴史的分野においての価値認識の形成について、知識にとらわれない評価問題の在り方について、検討が必要である。

本時の学習を通して、学習前と学習後の社会認識形成や市民的資質育成についての変容のようす、知識の構造化を意識した授業構成など行うことなど、学習者・授業者双方への分析が必要であった。

(授業者：坂田元丈)